

琉球大学学術リポジトリ

ジーン着用からみた大学生の衣服観〔2〕 - 10
年前と現在の学生の比較を通して -

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2009-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 綾子, Fujiwara, Ayako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13709

ジーン着用からみた大学生の衣服観〔II〕

—10年前と現在の学生の比較を通して—

藤原綾子

A Study on Students' View of Wearing Jeans.〔II〕

—Comparing Students of Ten Years Ago and Today.

Ayako FUJIWARA*

(Received August 20, 1983)

1. はじめに

今日の著しい社会情勢の変化に伴い、大学においても学生の様子には、昔と今で大きな変化がみうけられる。

学生の生活の一端である衣生活の面でも、その社会的な役割に対する認識も変化してきたものの一つである。

前報¹⁾で述べたように、昔からジーンは学生にとって最も身近な衣服であるので、ジーン着用から衣服観をさぐり、さらに学生気質の一端を知りたいと考えた。

環境を異にする現代の学生については前報で報告した。

今回は、10年前と現在の学生のジーンに対する衣服観について調査し、比較検討を行ったので以下に報告する。

II. 調査方法

1. 調査時期および対象

調査は昭和47年6～7月と、昭和57年6月に実施した。

調査対象は昭和47年の調査が琉球大学教育学部学生(昭和44～46年入学学生109名)と昭和57年の調査が同じく教育学部学生(190名)である。

*Home Eco. Dept., Coll. of Education, University of the Ryukyus.

2. 調査内容および方法

調査の内容および方法はほぼ前報のとおりである。

分析方法も前報のとおりである。

III. 結果および考察

学生の概況

10年前の学生は、沖縄の本土復帰による琉球大学が国立大学となったのが昭和47年5月であるので、復帰以前の入学生ということになり、従って県出身の学生が多数を占める。

現在の学生は国立大学になって10年時点の学生である。

調査の有効回答数は表1に示した。

表1 有効回答数

	10年前の学生	現在の学生
男子	55	98
女子	54	92
計	109	190

着用開始時期

着用開始時期については図1に示した。現在の学生が小・中学生の頃と答えたのに対し、10

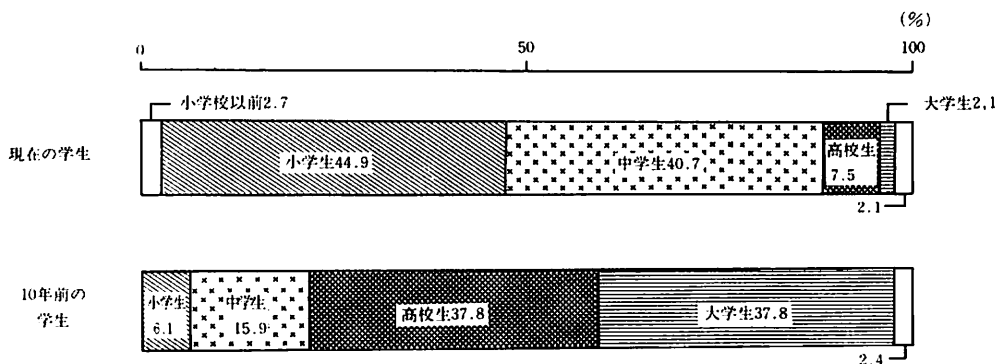


図1 ジーバンの着用開始時期

年前の学生は高校生、大学生の頃と答えたのが多数であった。

両者は時期的にはほぼ同時期で、約10～15年程前である。この時期は日本においてはジーパンの大衆化の時代で、生産量も増大し、着用の年齢層も広がっていった時期である。²⁾

所持数・耐用年数

所持数に関しては前報と同様個人差が大きい。現在の男子学生の平均6.8本、10年前の男子4.5本であった。女子は現在の学生2.3本、10年前の学生4.2本であった。

10年前と現在の学生を比較すると男子は現在

の学生が2本多く所持しており、女子では10年前の学生の所持数が多かった。

耐用年数では、10年前、現在で大きな差はなく、平均して4～5年であった。10年前の学生が、廃棄の理由に、すり切れ、そして型くずれをあげているのに対し、現在の学生は型くずれをあげている人が多かった。こういう所にも現在の学生のあまり物を大事にしない学生気質がうかがえる。

着用頻度と継続着用

ジーパンの着用頻度については図2に示した。男子は10年前、現在とも「毎日」ないし「週

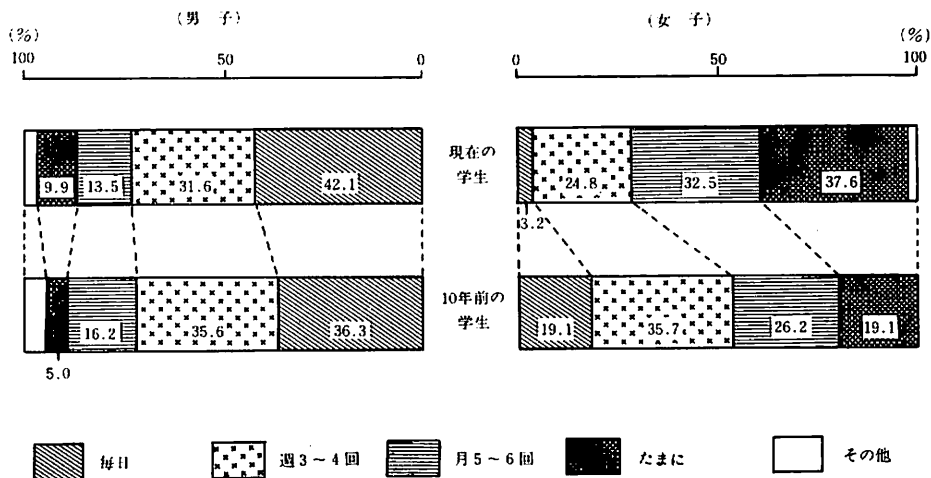


図2 ジーパンの着用頻度

藤原：ジーパン着用からみた大学生の衣服観〔Ⅱ〕

3～4回」と答えたのが全体の72%もいた。女子では10年前で「毎日」「週3～4回」合わせて約55%であったが、現在の学生では28%と約半数に減少していた。

次に3～4生についてはずっと継続して着用してきたか、1～2年生についてはこれからも4年までずっと着用するつもりであるかを質問した結果は図3に示した。

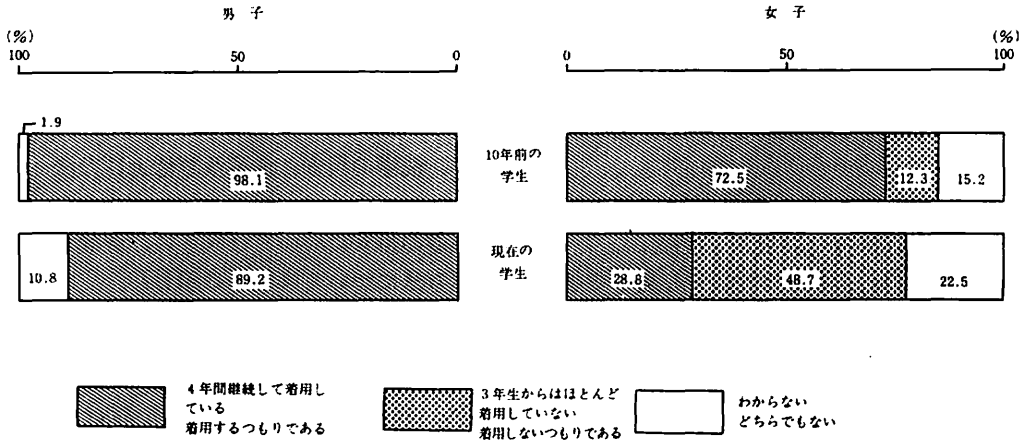


図3 ジーパンの継続着用

結果から明らかなように男子は10年前、現在とも愛用者は4年間の継続着用であった。

女子は10年前の学生で4年間継続組は72.5%であったのに対し、現在の学生では28.8%に減少していた。そして「3年生からは着用していない、しないつもりである」の割合が増加していた。

以上のことから着用頻度や継続着用では男子は10年前、現在と大きな変化はないが、女子では、3年のはじめをめぐり意識の変化があり、

その結果、ジーパンの着用もへっていることが明らかになった。3年生という時期に女子はワンピースやスカートをはき、同時にサンダルやパンプス、ブーツ等のおしゃれを楽しむようである。女子学生において、後に述べるがジーパンを性差を意識せずにきらられる服と評価していることから、この時期が性を意識する時期のように思われる。

中部被服研究会が愛知、岐阜、三重の三県の短期大学女子学生を対象に行った調査³⁾でも、

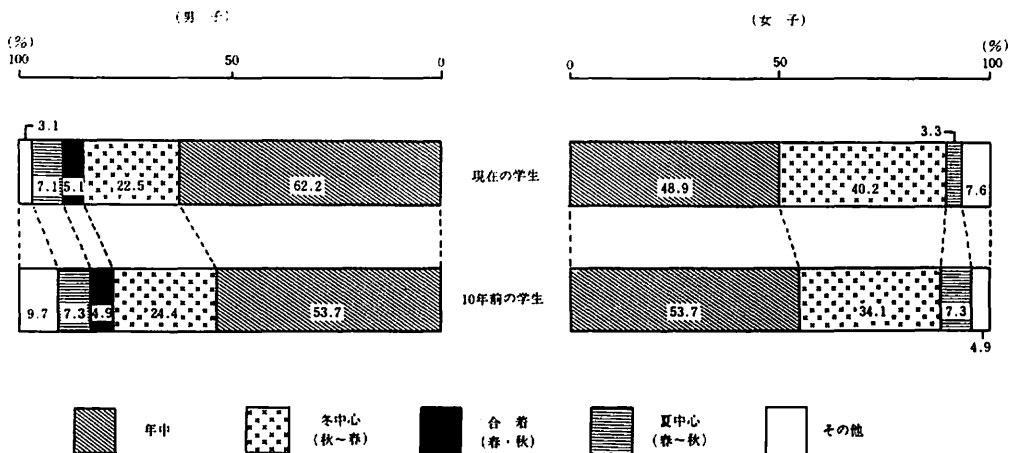


図4 ジーパンを着用する季節

短大の1年生の時はジーパンの着用は多いが、2年生になるとスカートへの移向がみられたと報告していることから琉大の学生に限ったことではないことがみとめらる。

ジーパンを着用する季節

ジーパンを着用する季節については図4に示した。

10年前、現在ともに、「年中」着用(第1位)、「冬中心」(第2位)が大半を占めた。この傾向は男女とも同じであるが、男子では年

中の割合が女子よりも高く、従って男子は、10年変化なく、年中平均着用といえる。女子は順位では2位である冬中心の着用が男子よりも高く、従って女子の場合、ズボン型の防寒性をかわれて冬の衣服としての利用が高いようである。即ち、個性を意識した着用よりも実用性に重点がおかれているようだ。

洗濯の目安、洗濯及び仕上げ方法

洗濯の目安については図5に、洗濯および仕上げ方法については図6に示した。

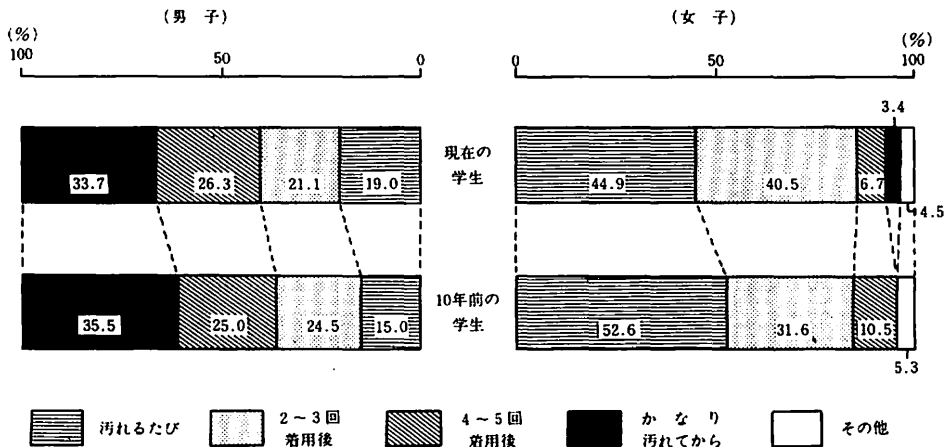


図5 洗濯の目安

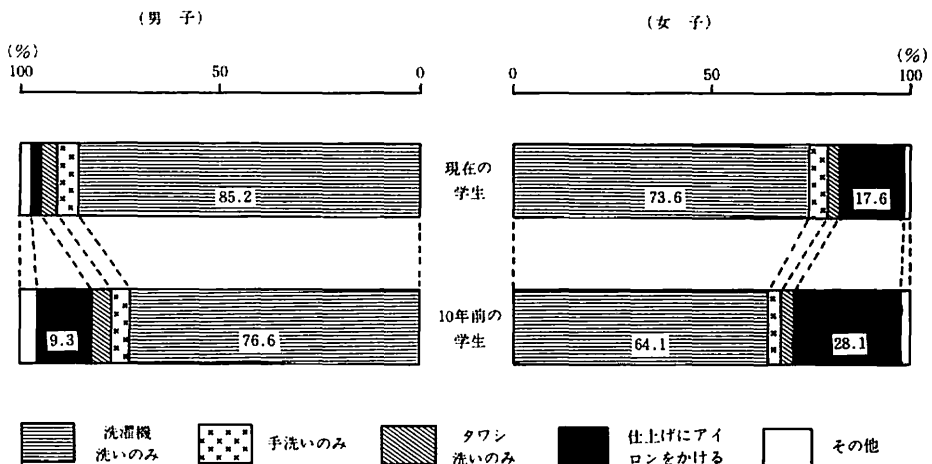


図6 洗濯及び仕上げ方法

藤原：ジーパン着用からみた大学生の衣服観〔Ⅱ〕

男子は10年前、現在とも洗濯の目安を「かなり汚れてから」「4～5回着用後」と答えた人の割合が高かった。女子は10年前、現在とも、「汚れるたび」「2～3回着用後」の割合が高かった。

洗たくの目安は10年前、現在とほぼ同じ傾向を示した。

洗たく及び仕上げ方法では、洗濯機又は手洗いによる洗いだけの人の割合が男女とも、10年前より増加していた。そして10年前の学生の方

が男女ともにアイロンかけをする人の割合は高かった。この辺にも昔と現在の学生の差がみられる。

ジーパン着用の理由

ジーパン着用の理由については図7に示した。

現在の学生が男女ともに「汚れても気になら

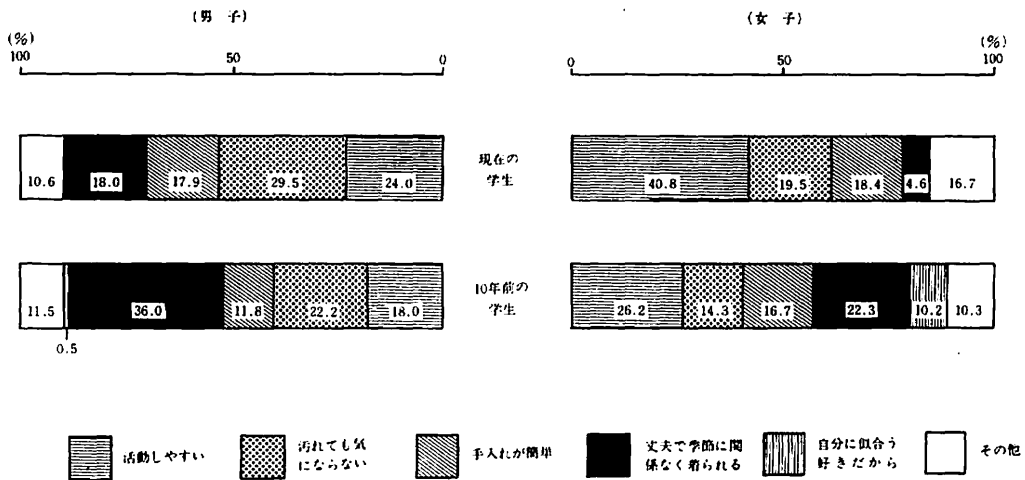


図7 ジーパン着用の理由

ない」「活動しやすい」そして「手入れが簡単」をあげたのに対し、10年前の学生は、男女共に「丈夫で季節に関係なく着られる」「活動しやすい」「汚れても気にならない」をあげていた。

中でも10年前の学生では「丈夫で季節に関係なく着られる」(男子の36%、女子で22%)の割合が高いのが特徴的である。

「自分に似合う、好きだから」と答えたのは、10年前の男子で(0.5%)のみみられた。ジーパンには審美的、個性的要素を求めているようである。

以上のことから、ジーパンという衣服を、10年前の学生は経済性で評価し、現在の学生は実用性(便利性)で評価していることがみとめられた。

ジーパンの着用と生活目的

ジーパンの着用の際、時・場所・場合を考えているかの間に対する結果は図8に示した。

男子では「考える」と答えた人の割合は10年前の学生が高く、検定の結果危険率1%で有意な差がみとめられた。

女子では現在の学生の方が10年前より「考える」と答えた人の割合は高い。

次に大学生が経験している時、場所を具体的にあげ、その時や場所に「実際に着用したことがある」又は「着用したことはないが着用してもよいと思う」と答えた人を許容者として学生の意識を調べたのが表2である。

具体的な時・場所・場合を二つに分類し、日常的な行動の時や場所をA、その他非日常的な

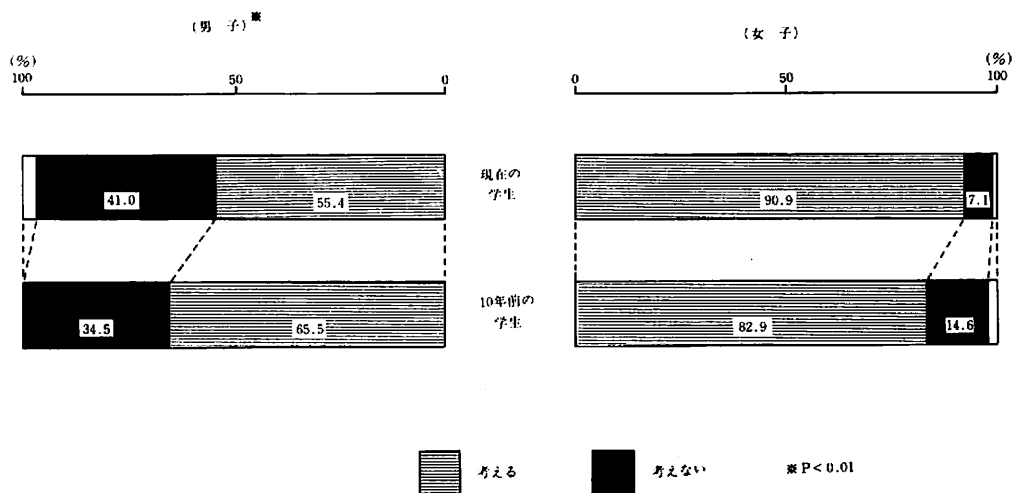


図8 時・場所・場合を考えてジーンズを着用する割合

表2 種々の時・場所・場合におけるジーンズ着用の許容度

(単位%)

	項目	現在の学生	10年前の学生
A	大学構内	98.5	98.8
	家庭教師(アルバイト)	86.9	90.2
	買い物を目的とした繁華街	98.5	97.6
	遠方の友人宅	80.2	86.6
	ピクニック	98.8	100.0
	スポーツ時 ※※	56.7	78.1
	自宅でくつろぐ時	91.1	97.6
	労務(アルバイト)	87.5	97.6
	作業時	89.0	100.0
B	学校見学(含教育実習)	27.4	25.4
	入学式 ※	21.0	11.0
	卒業式 ※	14.6	9.8
	結婚式	5.8	3.7
	告別式	0.9	1.2

※ P < 0.05

※※ P < 0.01

時や場所をBとした。

表から、10年前、現在ともにA類で高い許容度を示し、B類では低いことが明らかとなった。大きな差がみられたのはA類の「スポーツ時」とB類の「入学式」「卒業式」であった。検定の結果、「スポーツ時」は危険率5%で、「入学式」と「卒業式」は危険率1%でそれぞれ有意な差がみとめられた。

スポーツ時の許容の差の原因については、昔にくらべ現在はスポーツウェアが種類、品質とも豊かになっている、しかも伸縮性の大きいニット製（編地）がスポーツウェアの大分を占めている等が考えられる。

ジーンズやトレーニングズボン（織物）などは、昔は運動会などでもみかけたが、現在はニット製のトレパンや短パンに地位をゆずっている。現在の学生はスポーツには伸縮性のある服がいいということを知っているためである。

ここでジーンズの身体に与える影響についてこれまでの報告⁴⁾⁵⁾をみると、ジーンズを着用し

て動作をすると、体に圧力（衣服圧）がかかり腹部の緊縛が大きくなり、生理学的にみてもよくないことがわかっている。

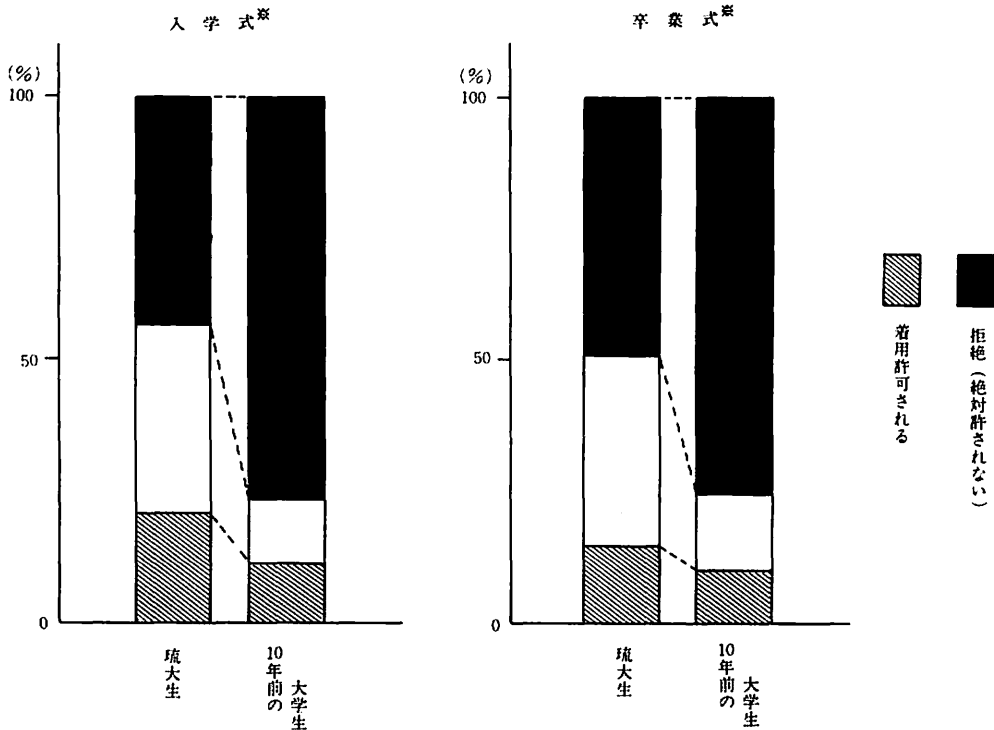
以上のことからスポーツでも軽いスポーツ、レクリエーション等の時の着用には適するが一般のスポーツ時には適さないことは明らかである。

これはスポーツに限らず作業でも言える。ジーンズは丈夫で、よごれが目立たないことから作業衣としては最もよいように思われるが、ひざをまげた姿勢をとる草刈りなどの作業では能率があがらない。どちらかといえばトレーニングパンツの方が機能的に良い。

現在の学生はこの辺も理解しているようである。

「入学式」や「卒業式」に対しては昔の学生よりも現在の学生の許容度が高く、入学式で21%、卒業式で約15%を占めた。

この二つの項目について許容と拒絶の割合を示したのが図9である。ここで拒絶とは、着用は絶対許されない、と考えている人で、グラフ



* P < 0.01

図9 目的別における許容と拒絶の割合

の白い部分は中間意見とみてよい。

10年前の学生は現在の学生より許容の割合が低い(入学式11%, 卒業式9.8%)分だけ、拒絶は高い割合(いずれも75%)を示している。

現在の学生は拒絶の割合は45~50%と低い。

近年、大学の入学式ではたびたび、卒業式では時たま、ジーパン姿をみかけることがある。現在の学生にとって入学式や卒業式という儀式はもはや厳粛な儀式ではなくなり、日常的な時や場所になりつつあるように思われる。

ジーパン着用時の気まずい経験

ジーパン着用した時の本人の気まずい経験の結果を図10に示した。

経験有りとなされた人の割合は男女共に10年前より若干ふえていた。

この内容は男子が入学式、結婚式、教育実習の時、という時や場所での経験である。女子はクラス会、空港、アルバイト先、などでの経験であった。

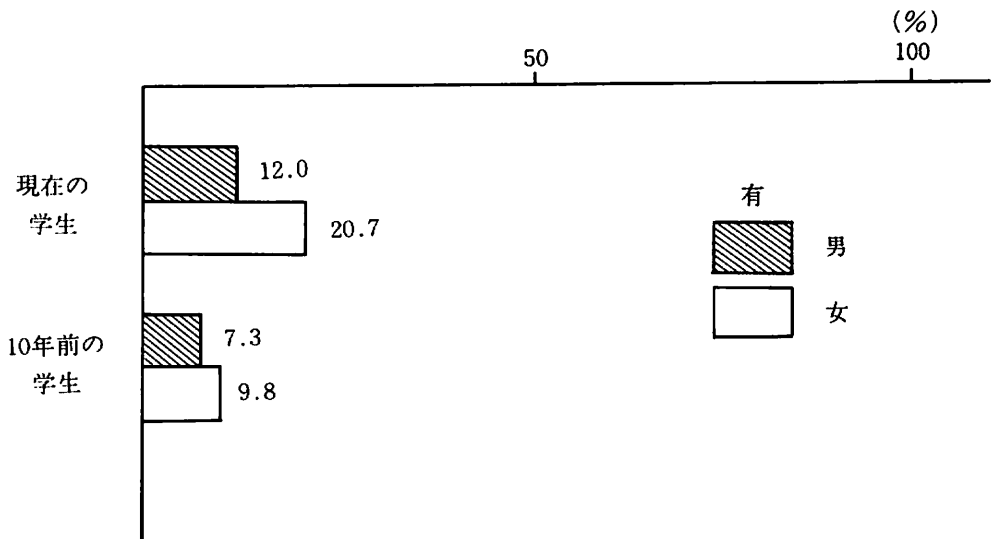


図10 ジーパン着用時の気まずい経験

現在の男子学生は先の許容の時、場所、場合の表で示されたように、入学式や卒業式などかまわないと考える者がふえてきている。事実若者の結婚式などでもみかける。自分の尺度でかまわないと考えて着用したものの、着用した時や場所で気まずい思いをしているようである。

以上から、現在の学生は生活目的に合わせて着装するという意識が低いようである。

ジーパン着用者から受けた不快な経験

ジーパン着用者から受けた不快な経験を図11に示した。

経験有りとなされたのは、10年前の学生の男女、

現在の学生の男子で約20%とほぼ同程度であった。35%という高い割合を占めたのは現在の女子学生であった。

その内容は大学構内で、汗くさい、よごれた、よごれてヨレヨレのジーパンから受けた不快感であった。

島袋⁶⁾は大学生と同年代の社会人のジーパン着用について調べたが、その中で、社会人は職場、結婚式、などでの時、場所をわきまえない着装に対する不快感が最も多かった。

生活目的に合わせた着装というのは大学とはちがう一般社会での生活経験から得られるようである。

最後にジーパンという衣服に対する評価を記

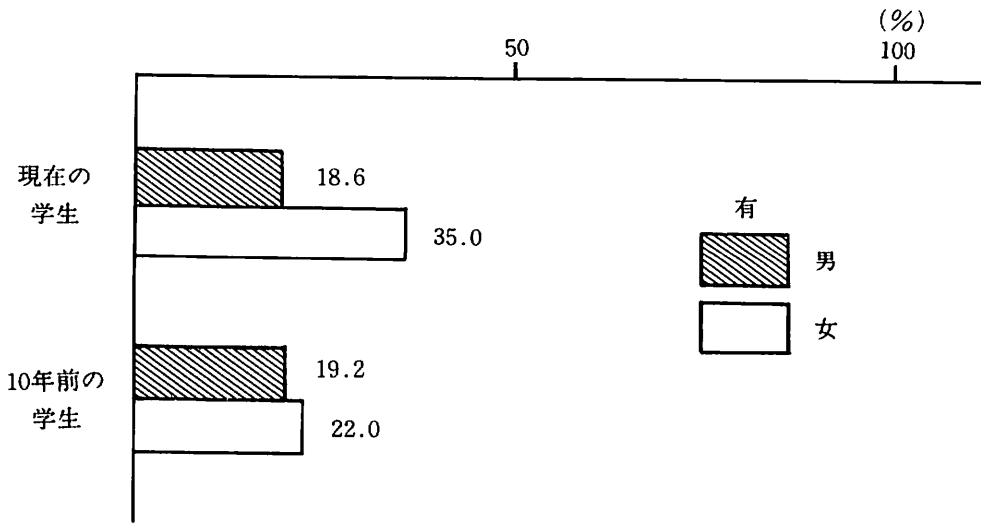


図11 ジーパン着用者から受けた不快な経験

入させたが、まとめると次のとおりであった。

10年前の男子は「一年中着られる丈夫な衣服」「作業時に着る服」ととらえているのに対し、現在の男子は「どこへでも着ていける服」「作業時に着る服」ととらえていた。

又女子では10年前の女子は「年中着られる衣服」「性差を意識せずに着られる衣服」「公的な場所へは着用できない遊び着」としてとらえていた。現在の女子もほぼ10年前と同じ傾向である。

以上から、着用の面で10年前と現在で変化していたのは、女子の着用が減少したこと、これは3年生からの着用が減り、スカート、ワンピース等への移向が原因である。

意識の面では、男子において10年前、季節に関係なく年中着られる日常着から、どこへでもきていける日常兼外出着として考えるようになったことが大きな変化だといえる。

社会の情勢は衣服の面ではますます個性化、カジュアル化の方向へ向かっており、大学生もこれに相関して同様の傾向に向かうであろう。

被服の教育では、こうした学生の意識や実態をふまえた上で、再度被服の役割や機能について重点的に指導する必要があると思われる。

IV. 要 約

大学生の衣服の一つであるジーパンに関する意識や実態が10年前と現在でどう変わったのかを明らかにする目的で昭和47年の琉球大学教育学部学生を対象に行った調査と昭和57年本学教育学部学生を対象に行った調査を比較検討して次の結果を得た。

- 1) 10年前と現在の学生を比較すると男子はほぼ同程度の着用があるが、女子は減少した。この原因は女子の他の服（ワンピースやスカート）への移向が大きいためである。
- 2) ジーパン愛用の理由として、10年前の学生が男女共に、丈夫で季節に関係なく着られるという経済的理由をあげたのに対し、現在の学生は、汚れても気にならず、手入れが容易であるという実用的な理由をあげていた。
- 3) ジーパンを着用できる時、場所、場合として、10年前の学生は日常的な時や場所だけを考えていて冠婚葬祭の場は絶対にいけないと考えているのに対し、現在の学生は入学式、卒業式まで着用してよい、そして

時には結婚式などの着用も考えている。現在の学生にとっては入学式や卒業式はもはや日常的な時、場所になっているようである。

- 4) ジーパンという衣服を10年前の男子学生は年中着用できる衣服、作業服ととらえているのに対し、現在の男子はどこへでも着ていける衣服ととらえ、衣服観は10年前と現在で大きく変化している。女子学生は10年前、現在とも大きな変化はなく、性差を意識せずに着られる衣服、季節に関係なく着られる衣服、遊び着、作業着としてとらえている。
- 5) 全体としてジーパンは10年前から現在まで、実用的な衣服であって、ファッション的な個性を表現する衣服ではないようである。

おわりに本調査に御協力下さいました本学教育学部花城梨枝子先生、卒業生の島袋睦枝さんに深く感謝申し上げます。

V. 文 献

- 1) 藤原綾子 ジーパン着用からみた大学生の衣服観
〔1〕 琉球大学教育学部紀要第27集 2部
(1983)
- 2) 講談社編 ジーンズ大研究 117 講談社 (1981)
- 3) 中部被服研究会調査研究グループ(楢山藤子 中野刀子) 衣生活を通してみた学生像(1)衣生活研究 第5巻6号 (1978)
- 4) 奥野右子他 スリムなジーンズの身体に及ぼす影響 衣生活 5巻2号 (1982)
- 5) 中橋美智子・渡辺恵美子 ジーパン着用時における機能性に関する衛生学的研究 第33回日本家政学会総会発表要旨集 118 (1981)
- 6) 島袋睦枝 大学生の衣服観 昭和57年度琉球大学教育学部家政学科卒業研究28~29 (1982)
その他(参考文献)
- 7) 北田総雄 衣生活調査法の考え方と進め方 (1)~(3) 衣生活研究 第9巻2~5号 (1982)
- 8) 川本勝 流行の社会心理 勁草書房 (1982)
- 9) 浜野安宏 ふだん着の時代 ビジネス社 (1981)
- 10) 倉智佐一 教育統計法要説 協同出版 (1973)
- 11) 家永三郎 日本人の洋装観の変遷 ドメス出版 (1979)
- 12) 加藤秀俊 衣の社会学 文芸春秋社 (1981)